

## 奨学財団の楽しみ

渥美伊都子

渥美国際交流奨学財団も早いもので今年第7期生を迎えました。毎年12名というささやかなものですが、渥美奨学生も年々増えて本年度で82名となりました。

私達は1年のうちになるべく皆様と交流をしたいと思い、軽井沢の合宿、お正月のもちつき大会、又奨学生のお国自慢の料理を作って食事会をしたり、食べに行ったりして、だんだんとご家族の方達とも親しくなるよう心がけてまいりました。

奨学生は大変優秀な方々で、すでに博士号を取得された方が55名のほり、1年の給与期間が過ぎても頑張っていて2~3年のうちにはほとんどの方が博士号を取得されています。これ等の取得された方々は自国へ帰られて後進の指導や研究生活に入られたり、日本で就職したり、又他の国の研究所に移られたり各々の道に進んでいらっしゃいます。年々この優秀な若者達による国際的なネットワークの輪が広がるのを感じ、この有意義な仕事を始めてよかったとしみじみ感じるこの頃です。これも一重にこの財団の設立よりご援助下さった方々の多大なご支援とご協力の賜物と心から感謝申しあげております。

今西常務理事と嶋津事務局長が中心になって昨年7月に設立した関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）は、渥美奨学生の同窓会が中心となり、日本を中心とした多国籍で知的なネットワークを構築し、社会に発信していこうという活動をめざしています。貴重な留学生ネットワークを使って、この激変の時代に対応していくための提言や啓蒙活動を行っています。

昨年7月26日には、当財団評議員の船橋洋一様をお願いして設立記念講演会「21世紀の日本とアジア」を開催しました。11月9日には一橋大学の

関啓子教授とニューヨーク大学のピッヒラー客員教授をお招きして第1回研究会「地球市民の皆さんへ」、2月9日には名古屋大学の平川均教授とアジア21世紀奨学財団の角田英一常務理事をお招きして第2回研究会「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」、5月30日には早稲田

大学の木村建一名誉教授をお招きして第3回研究会「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」を開催いたしました。

各回ともこれらの方々のゲスト講演に加え、SGRA研究員も研究報告を行い、講演録を発行してお



SGRA 設立記念講演会

ります。また、軽井沢合宿の時にセミナーを開いたり、東京都の「地球市民フェスタ」に参加したりしています。まだまだ生まれたばかりで試行錯誤しながら進めている活動でございますが、こちらの方もご支援をいただけますと幸いです。

\* \* \*

私達は海外に旅行するたびに、元奨学生をお尋ねしてお会いするのを楽しみにしております。

昨年9月には、今西と一緒にフィレンツェで開かれた妹石川ヨシ子の個展の開会式に出席すること

になり、その前に第3期生のシルバーナさんのご実家をお尋ねしました。シルバーナさんはローマまで迎えに来て下さって、ナポリを案内して頂いてからソレントのお宅までドライブしました。風光明媚な地で知られるソレントまで



の道は片側が紺碧の海、片側の斜面にはレモンやオリーブが実り、とても豊かな素晴らしいところでした。お家に伺うとナポリ大学の教授をしておられたお父様、それに伯父様、妹さんご家族、近くに住んでおられるお姉様も加わって典型的なイタリアの暖かいご一家で、私達を大歓迎して下さいました。お母様のお手作りのパスタや肉の煮込み、果物やケーキと食べられないほどのご馳走と地酒の赤ワインをいただきながらシルバーナさんの通訳で楽しい一夜もあつと

いう間に過ぎてしまいました。日曜日には教会の帰りに伯父様や親戚の方達が集まって昼食をなさるのが恒例となっているとのこと。

この時は、シルバーナさんにすっかりお世話になりました。ナポリはジプシーが多く「すりにご用心」と云われながら何事もなくフィレンツェに向かうことが出来ました。

そして半年後の今年の4月、シシリー島へ行きませんかと義弟渥美謙二夫妻(当財団評議員)にさそわれ、再びイタリアへ旅することになりました。私は父が外交官時代にローマで生まれましたので伊都子(イタリアの都の子)と命名されました。生まれて2

年弱で帰国してしまい、何も覚えていないのですが、とてもなつかしく何度でも行ってみたい国です。父はその後退官し博士論文やその他の著述をしてから、祖父に請われて母の家業である鹿島組へ

入社し、実業界に転じました。

シシリー島の旅の終りにローマに立ち寄り、またシルバーナさんにお世話になりました。美術館や遺跡を見物してから帰りに、子供の頃ボルゲーゼ公園の近くに住んでいて両親と公園をよく散歩していたと聞いておりましたので寄ってみました。丁度桜や藤やミモザなどの花が一度に咲きみだれてとても美しく、小さい子供達が母親につれられて遊んでいるのを見てほのぼのとなつかしさを感じました。